

☆地域包括ケアふじえだプロジェクト☆

平成30年5月22日 VOL. 58

ずっと家で過ごしたい 大丈夫 私たちに任せて！ 訪問看護を知ってください

平成30年5月14日(月)に文化センターで開催された、青島地区さわやかクラブ連合会女性部すこやか学級(代表：大井 みつ子 氏) の研修会において、藤枝市立総合病院及び市内訪問看護ステーションと協働し、在宅看取りをテーマに出前講座を行いました。

寸劇 あらすじ

脳梗塞後遺症で在宅療養していた石神直之さん(86歳)が、末期のすい臓がんと診断されました。直之さんの「**自宅で看てもらいたい**」という気持ちを汲み取り、訪問看護師を中心にケアマネやかかりつけ医が本人と家族を支えて最期を看取りました。



家族会議の場面



主人公の直之さんは元小学校の校長先生。定年退職後は野菜作りを楽しみに、奥さんと長男家族と生活してきました。直之さんは8年前に脳梗塞を患い右に麻痺が残りましたが、介護認定を受け通所リハビリを続けてきました。ところが3カ月前、背中と脇腹の痛みと食欲がない、だるいなどの症状が出たため検査入院したところ「すい臓がん」で余命1カ月と説明されました。「できるだけ治療してもらおう」「療養できる病院へ転院する」など、今後の事を家族で相談しました。

直之さん「脳梗塞よりショックが大きい。長く生きたからもういいかな...でも怖い。その家は妻弘美と二人で建てた家で、子育ての思い出もある。ここが良い。痛みを少なくして最期までここにいたい。世話をかけるが私の最後の願いを頼みたい」

妻は「介護保険もあるし、訪問看護師さんが相談にのってくれるって。かかりつけの小澤先生も来てくれるって。好きなお風呂にいつだって入れてあげる。私、頑張るよ(長男夫婦はあてにならないけど)」
嫁は「仕事が忙しくていつもは手伝えないけど、手が必要なら言ってくださいね(不安だけど)」

頼りになる訪問看護



訪問看護師は入院中から自宅での生活を見据えて、介護方法や環境についての相談にのりました。そしてかかりつけ医と相談しながら痛みや排便コントロールの支援や栄養状態の観察、薬の管理や指導も行いました。



市社協成年後見支援センター作成

直之さんはケアマネさんに勧められ「想いつむぎノート」に「終末期・延命治療・尊厳死・葬儀・お墓・相続などについてのわたしの希望」を書いていました。

今回の寸劇の統括を行った藤枝市立総合病院医療支援センター井原部長より、市民の在宅療養のニーズに応えるため、住み慣れた生活の場において、可能な限り医療・介護サービスが受けられるよう多職種・多機関が連携することを説明しました。

約200人の聴講生は寸劇に笑いを誘われながらも、「自分はどうしたいか」を考え「訪問看護」について学びました。



健康福祉部 地域包括ケア推進課

TEL 054-643-3225 E-mail chiikicare@city.fujieda.lg.jp